

「ワークショップ・ミリタリーをどうするか — ガルトゥング博士とともに考える —」 参加報告記 (2011年9月16日実施)

野島 大輔

(関西学院千里国際 高等部教員)

1. 概要

所属校の科目「平和学入門」の校外学習として、同日午前中の立命館大学国際平和ミュージアムの展示見学を経て、生徒たちと共にガルトゥング博士の講演に参加することとなった。参加した高校生たち（8名）は討論の部では各グループに分散し、事後に話し合いの内容について、情報を交換し合った。開催日が後期開講前の平日ということもあり、立命館大学の学生たちの割合が高かったが、一般の参加者や海外からの参加者の姿も多くあった。参加した高校生たちはおそらく最も若い年代の参加者であったと思われる。討論グループはそれぞれ任意の相手と8～10名程度になるよう編成され、ガルトゥング博士の講演内容に関する感想や意見、質問事項などについて交換し合った。うち一つは英語を用いての討論グループであった。

2. 各グループでの討論の内容

(○は高校生の感想、原文より抜粋)

(1) 自衛隊による紛争への非暴力介入の可能性について

○「非暴力のPKO」が議題にあがったときには、武装する必要があるから武装しているのだという意見がでて、非武装は理想であって現実是不可能という意見が多かったです。

○武装せずに紛争地への平和的介入は無理だと言っていました。彼らが言うには、武装せずに紛争地へ行っても、平和的な交渉どころか敵の的になるだけだそうです。＜中略＞これに対して私は「重武装なんて威嚇的な態度で行ったところで平和的な交渉は望めない」と反論しましたが、私たちは結局納得のいく結論にたどりつけませんでした。

自衛隊による可能性の有無に限らず、そもそも非武装の紛争介入についての困難性が論題に上がっていたようである。ガルトゥング博士が別の論稿に記してい

るように、紛争への平和的な介入は、情勢を精緻に見極めながら、紛争予防、紛争転換、平和構築、平和維持、平和地帯の創設、和解・再建などの作業が、紛争のどの段階で行われるべきか、熟慮することが必要となる。^{注)}

(2) 憲法9条と自衛隊のあり方について

○9条は平和の9条ではなく、反戦の9条である、という言葉は印象に残りました。私がディスカッションの中で思ったことは、いくら3項として新しい条項を付け加えたとしてもまず、国民が理解・納得していないと意味がないということと、日本がそれを行ったとしても、他国が理解してくれるのかということが挙がっており、日本の問題は、ただの政府だけの問題でもなく、国内だけの問題でもないということが分かりました。

○話を聞いていて強く印象に残ったのが、日本の国としての決断力の無さです。＜中略＞自分も物事に対して「どっちでもいい」や「わからない」という曖昧な答えをすることが多々あるなど思われました。もう一つ印象に残ったのが、変化は外部からじゃなく内側から起こるべきものということです。当たり前だけど、この先は、自衛隊や国が変わらないといけないと思う時は、国民である自分たちがこうしたい、とちゃんとした意志を持って率先して行動しないとイケないのだと改めて実感しました。

○昔の人々は憲法9条を理想として、自衛隊ができることにたいしてもものすごく反対したと言っていました。しかし、今では憲法9条と自衛隊の両立に賛成の人が増えているみたいです。

○日本の自衛隊の軍事力が強大ならなぜ日本はアメリカと手を結び続けているのだろうか？戦後アメリカから独立しても、アメリカが答えを迫ればアメリカ側の答えを出す日本。＜中略＞中立国に

なってどの国にもつかないほうがいいような気がする。そして世界で唯一原爆を落とされた国として、いろいろな世界の問題解決に取り組んで行くべきだと思いました。

○このグループではself-defenseの"self"とは何か、日本とは何か、という疑問が出て、メンバーの1人にガルトゥング先生は"self"とは領海、領土、領空に限ったものだとして答えて下さいましたが、私は質問された時に何のアイデアも浮かびませんでした。このグループでは仲のいい国なら"self"の範囲に入れても良いのではという意見が出ました。

日本の再軍備や安保条約の改定など時代のターニングポイントを直視してきた世代にとっては、憲法9条の平和創造の視点の欠如を指摘するガルトゥング博士の論調は、時に厳しく響くものであるかもしれない。一方、日本の主権国家としての自立性や、主権者としての国民たちの政治的な意思決定への関与の問題、安保や軍隊の本質、という議論は、こうして今も若い世代の心中を、引き続き打ち鳴らし続けている。ただ、従来からの平和運動・護憲運動には、この他の社会運動全般にも見られる「高齢化」の波が押し寄せており、その継承をどう発展的に進んでいくか、また21世紀の新たな形態の暴力に対する平和への動きを国内でどう形成していくか、という課題は依然として突きつけられたままである。

3. まとめ

○ディスカッションの質問も「こんな質問していいのかなあ？」と思うように思ってしまう、結局質問する事ができませんでした。＜中略＞自衛隊をどうするか？と意見をいう前に、何も知らない自分が浮き彫りになって、もっともっと色々な事を知りたいと思いました。

○私たちのような若い世代の意見がフレッシュであるので、もっと聞きたいとおっしゃって下さいました。

高校生の参加に対して、このように様々な配慮を受けたことに対し、引率者として心より御礼を申し上げます。世代間の連帯が平和運動の大きな課題となっているが、思考の全体的な閉鎖性や保守化の傾向が指摘される現代の日本社会において、自ら平和の問題を引き受けて創造的に考えようとする若者たちに繋がる命脈を、私たちはけして絶やしてはならない。

○対テロ戦争の泥沼化に関しては、先にテロをしかけてくるからしょうがないという意見が多くでした。そして、もし「テロをうけて、対話して、相手の意見を聞く」がうまくいくと、テロをしかけた側は味をしめ、何かいやなことがあるとすぐテロ行為に走るのではないかという懸念も浮かびました。でも、そう思っている人が多いからいつまでも泥沼なのでは？とも感じました。

一方、私のグループや、他のグループにおいても、自衛隊をこれ以上小さくすれば中国や韓国・北朝鮮にどうやって対抗するのか、という若者の言動も聞かれた。ガルトゥング博士が講演会の冒頭で述べたように、自衛隊の実力が世界有数のものであることは、中・高の教科書にも書かれているが、米軍と協働する自衛隊が東北アジア社会にどれほどの軍事的な圧力を及ぼしているか、周辺国の立場から考えてみたことのない若者もあることに驚かされる。また、テロリズムについてもその現象だけを見るのではなく、歴史上のトラウマや、富・権力の極端な非対称などその深層を見ることが必要であるとするガルトゥング博士の主張からも、大いに学んでもらいたいところがある。

高校生たちの貴重な一日の学習経験を振り返りつつ、憲法と自衛隊との緊張関係を捉え続けてきた従来からの平和教育の成果を、21世紀の現状にも即しながら次世代に伝えていくような平和教育の再生を、私は強く願うものである。ガルトゥング博士、西村先生、関係の方々々に心より感謝を記す。

注) ヨハン・ガルトゥング「平和の探求—テロリズムと国家テロリズムの世界にあって」『平和運動と平和主義の現在』風行社 2008年